

エーリツヒ・フロム

希望なき時代の希望

◎ 出口剛司著

本書は、フロムの『自由からの逃走』と、その前後に執筆された著作を読み直し、穏やかなヒューマニストと思われてきたフロムの裏側にある実像を描きだそうとした著者の学位論文に手を入れたものである。

アプローチの手段だが、ドイツからアメリカへ亡命する前のワイマール時代のドイツ系ユダヤ人・フロムの姿に注目することから始めている。それは、弁護士を目指しつつも文化社会学の内部に唯物論の場所を見つけだしたフロムで、その後の亡命を契機にスピノザとの出会いを迎え、スピノザの影響により唯物論的倫理学へと転回することになるが、前半で、その過程を再構成し、『自由からの逃走』のもつスピノザ倫理学と内部関連などを明らかにしていく。後半では、『自由からの逃走』に示された「二つの自由論」がアナーキズム思想へと発展していく晩年にかけてのフロムに射程を広げ、これまでのフロム像を一新していく。(A5判・30